

修辞学

森 雄一

修辞学の分野で、近年盛んに用いられている方法論は認知言語学あるいは語用論(とりわけ関連性理論)によるものであろう。平成22年においても、それぞれのアプローチからの重要な研究が公刊された。

初山洋介「百科事典的意味とメタファー」(『日本語研究の12章』明治書院)では、認知言語学の中核をなす百科事典的な意味観が、メタファーの分析において必要であることを論じている。「一般性」の程度が完全でない特徴を認めるといふ百科事典的な意味観の一側面に着目し、「理想例」や「ステレオタイプ」からのメタファー的拡張の実例を豊富に示す。特に「外野がうるさい」等の例に見られる「外野」が本来の野球における意味からどのようなプロセスで拡張しているのかについての分析は、筆者も長年関心を抱いていたものであり興味深かった。西山佑司・佐々木文彦「比喻表現における慣用語度について—アドホック概念形成の観点から—」(『明海大学大学院応用言語学研究』NO.12)は、関連性理論における「アドホック概念構築」(辞書上の意味概念を適宜調整して文脈にあてはめることによって表現を成立させるといふシステム)の一種として比喻をとらえ、その慣用語度の度合いと辞書における記述を分析している。「辞書上の意味概念の調節」といふとらえ方は、原理としてはシンプルであるが、拡張のプロセスを考えるためには、それがどのような意味概念である

か、前述の初山論文で扱われた「百科事典的な意味」との位置関係なども知りたく思う。大田垣仁「換喩と述定—内の換喩における流動的な名詞句解釈のヴァリエーションと成立可否の観点からみた—」(『語文』94)は、換喩の分類を扱った大田垣の一連の論考に連なるものである。名詞句の位置に生じる換喩を「名前転送型」と「役割転移型」に分け、さらに、佐藤信夫等が指摘してきた換喩の流動性と呼ばれる現象が生じるのは「疑似役割転送型」に限られるとしている。大田垣の示す区分が連続的なものか非連続的なものか等検討を必要とする論点も多いが、今後の論の展開が期待される。アイロニーを扱った文献としては、河上誓作「アイロニーのからくり」(『繊維機械学会誌』63(8))があり、日本語の「皮肉」という概念はあてはまりにくい、日本語のなかにも存在するものである「偽悪型アイロニー」の分析が興味深い。異分野の学会誌の巻頭言として、平易な文章で執筆されたものであるため、河上アイロニー論への入門としても有用であろう。

以上の4文献が理論的な分野での業績であったのに対し、応用的な分野で今後の発展可能性を提示してくれた論考として、妹尾俊之「広告修辞学の理論と実践」(『日経広告研究所報』251号)があった。佐藤信夫が筆名・高部伸夫を用いて執筆した『広告コピーのレトリック』(1966年)の先見性を評価し、ブランドコミュニケーションが大きな課題となった現在でも、広告論に修辞学を参照する意義が示されている。

(成蹊大学)